

<寄稿論文>ファセット・アプローチと価値観研究 : Louis Guttman とその共同研究者の知的世界の探索

著者	真鍋 一史
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	123
ページ	9-32
発行年	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/14609

〔寄稿論文〕

ファセット・アプローチと価値観研究*

—Louis Guttman とその共同研究者の知的世界の探索—

真 鍋 一 史**

I. はじめに

本稿は、Louis Guttman とその共同研究者による「ファセット・アプローチの構築」と「価値観研究の成果」を、関連文献にもとづきながら、詳細にあとづけていく試みである。

では、なぜこのようなあとづけを試みるのかというと、それは、いうまでもなく、このような試みが、今後の「価値観研究」の発展に大きく貢献すると考えるからにほかならない。

このことを、つぎのような具体的な例をあげて考えておきたい。現在、Shalom Schwartz の「価値観研究」が、心理学や社会学を中心に、広く「比較文化論」「パーソナリティ研究」「発達心理学」の領域において、世界のアカデミック・コミュニティで最も注目される研究の1つとなっている。それは、この研究領域の学術論文におけるその引用頻度の高さという点に如実に現れている。

Schwartz の「価値観研究」が注目を集めている証左のもう1つは、つぎの点に見られる。ヨーロッパでは、とくに1980年代以降、さまざまな社会調査が実施されることになり、そのような知的営為の促進・交流・統合の諸活動の組織化をめざして、2005年、European Survey Research Association (ESRA) が設立された。そこで、この学会の年次大会でオーガナイズされるさまざまなセッションのテーマを見ていくならば、この領域における研究動向をシステムティックに捉えることができる。そして、このようなセッションにおいて、設立当初から継続して取りあげられるととも

に、その時間数も多かったものの1つが「価値観をめぐるテーマ」であり、とくに「Basic Human Values」という特別の名称を掲げたセッションである。ここで、「特別の」という表現を用いたが、それは Schwartz が、「価値観」というテーマについての実証的研究において、まさにこの「Basic Human Values」というところに焦点を合わせてきたからにほかならない。つまり、このセッションは、Schwartz の「価値観研究」を「レファレンス・スタディ (reference study)」とし、その線上での研究の展開を射程に置いてオーガナイズされてきたといえるのである。

このように、Schwartz の「価値観研究」は、現在、社会科学の領域で、広く世界の研究者の関心を集めている。日本でも、その理論と方法は、さまざまな形——個別研究論文での引用、文化測定の研究事例、辞典・事典での解説などのさまざまな形——で紹介されてきている。

では、その内容がどのようなものであるかという点、それは、Schwartz が人びとの価値観を「環状連続体 (a circular continuum)」という形状で描き出したという点を中心となっている。そのような環状連続体にあって、それぞれ隣接している領域 (regions: 「扇形」あるいは「くさび形」の部分) に位置する価値観は、相互交換的な関係にあり、両者は類似の意味を持っている。そして、その環状連続体における反対側の領域に位置する価値観は、それとは対立する意味を持っている。これが Schwartz の価値観の基本的な構造モデルである。

では、以上のような Schwartz の価値観について

*キーワード：ファセット・アプローチ、ファセット・デザイン、ファセット・アナリシス、ファセット・セオリー、弱単調係数、最小空間分析、ラデックス

**関西学院大学名誉教授、青山学院大学地球社会共生学部教授



図1 Schwartz の価値観の環状連続体モデル

での環状連続体モデルは、どのように実証的に確認されるであろうか。Schwartz が利用した技法は、Guttman によって開発された「最小空間分析 (Smallest Space Analysis : SSA)」である。しかし、Schwartz が利用したのは、そのような「技法」だけではなかった。じつは、Schwartz が環状連続体と呼んだ価値観の構造モデルそのものが、Guttman の「ファセット・アプローチ」に由来するものであった。

ところが、これまでの Schwartz の「価値観研究」の紹介やその精査を目的とした論文においては、このようないわば「社会科学の領域における知的遺産の継承」ともいべき点については、全く論じられていない。これは、きわめて残念なことであるといわなければならない。

なぜならば、筆者の観点からするならば、Schwartz の「価値観研究」を Guttman の「ファセット・アプローチ」からの知的遺産の継承と捉えることで、その新しい開発と展開の可能性が示唆されることになると考えるからにはほかならない (Manabe, 2016)。

以上が、本稿で、Guttman とその共同研究者による「ファセット・アプローチの構築」と「価値観研究の成果」のあとづけを試みる理由である。

II. 研究の方法

繰り返しなが、本稿の目的は、Guttman とその共同研究者による「ファセット・アプローチの構築」と「価値観研究の成果」のあとづけということである。

そこで、では、このようなあとづけを、どのように——どのような方法で——行なうのが、つぎに問われることになる。

しかし、そのような問いに答えるに先立って、ここでは Guttman の研究業績の全体像を「ファセット・アプローチの構築」と表現したことにについて説明しておかなければならない。Guttman の研究業績について考える場合、米国の有名な科学雑誌 *Science* が、Guttman の開発した「ガットマン・スケール」を 20 世紀における社会科学の “major advance” の 1 つに選んだということは、きわめて象徴的な出来事であったといえる。例えば、日本においても、社会測定 (social measurement) の領域で、「ガットマン・スケール」を知らないという研究者はいない。ところが、「ファセット・アプローチ」はどうかというと、それについては、じつは専門家の間でもほとんど知られていない。つまり、Guttman の業績については、その「技法」のみが導入され、その「全体像」ともいべきものが紹介されてこなかったという事実がある。しかし、この傾向は、じつは日本だけのことではなかったのである。

では、Guttman の研究業績の全体像がどのようなものかという、Guttman のような「知の巨人」ともいべき研究者については、それは容易に答えられるような問いではない。そして、それだからこそ、「ガットマン・スケール」のような特定の「技法」の側面のみ光が当てられる結果となったのかもしれない。さらに、それだけにとどまらず、Guttman の研究業績がきわめてオリジナリティの高いものであり、いわゆる「通常の (conventional) もの」とは大きく隔絶したものであった、ということも大きな要因であったかもしれない。

こうして、「Guttman の研究業績の全体像がどのようなものか」という問いに、どのように答え

るかは、そのこと自体が1つの研究テーマなる。そして、このような研究テーマに果敢に取り組んだ研究者がいた。それは、Guttman が創設した「イスラエル応用社会調査研究所」の同僚、Samuel Shye であった。Shye は、Guttman の研究業績を広く概観するとともに、そのさらなる発展の方向を探るべく、*Theory Construction and Data Analysis in the Behavioral Sciences* (San Francisco : Jossey-Bass Publishers, 1978) の編集を企画するが、その際、Guttman の研究業績の全体像を「ファセット・デザイン」「ファセット・アナリシス」「ファセット・セオリー」の3領域のいわば三位一体の「知の体系」として捉えることを提案した。このような Shye の提案した「枠組み」は、これまでの Guttman 研究において、最も「要領を得たもの」といえる。その証拠に、その後 Guttman 自身も、その多年の研究の成果について語る際には、それはこの「枠組み」に沿う形でなされている (Recent Structural Laws of Human Behavior, *The Bulletin of the Institute of Communication*, Keio University, 14, 1980)。

以上から、Guttman の研究業績の全体像——ここでは、それを「ファセット・アプローチの構築」と呼ぶ——をどう捉えるかが明らかとなった。そこで、つぎの課題は、Guttman とその共同研究者の「ファセット・アプローチの構築」と「価値観研究の成果」のあとづけを、どのように行なうか、ということである。ここで「～と～」という表現をとったことから、筆者が「と」で結ばれた2つの事柄を、それぞれ別々のものとして捉えていることは明らかであろう。確かに、「ファセット・アプローチ」=一般、「価値観研究」=特殊という両者の概念的な区別は可能である。しかし、Guttman とその共同研究者の研究活動の実践の過程においては——そして、さらにそれにもとづいて執筆された「研究論文」や「調査報告書」の構成においても——じつは両者は不可分の形で結びついている。それは、上述の「ファセット・デザイン」と「ファセット・アプローチ」と「ファセット・セオリー」がいわば三位一体のものとして、不可分の形で結びついているのと同様である。その研究の過程は、具体的にいうならば、「ファセット・アプローチ」に導かれて、「価

値観調査」のデータ分析が行なわれるとともに、そのようなデータ分析にもとづいて、「ファセット・アプローチの構築」が進められる、というものである。

そして、そうであるならば、そのような両者の結びつきの知的世界は、どのようにしてあとづけしていくことができるであろうか。いうまでもなく、このような問題関心は、Guttman とその共同研究者による「知の創造の過程」の解明という研究テーマにつながっていくものである。それはそれで、きわめて興味深い研究テーマといわなければならない。しかし、本稿では、より限定的な形でのあとづけを試みる。具体的にいうならば、「研究論文」や「調査報告書」の形で発表された文献のみを手がかりとして、「ファセット・アプローチ」と「価値観研究」の実践的な知的相互作用のあとづけを試みるということである。

Ⅲ. ファセット・アプローチ

ファセット・アプローチは、Guttman によって考案された独自の社会測定のアイディアであり、実証科学のこの領域における1つの到達点を示す提案であった。それは、単なる「調査技法 (technique) 論」であることを越えて、独自の「科学方法 (method) 論」の立場を宣言するものであった。

以下においては、ファセット・アプローチの全体像を、Shye の「枠組み」にしたがって、「ファセット・デザイン」「ファセット・アナリシス」「ファセット・セオリー」に分けた上で、それぞれについて、筆者による解説も含めて、やや詳細に記述しておきたい。

1. ファセット・デザイン (Facet Design)

①観察 (つまり質問紙調査) のための概念枠組みの準備、②質問文と回答の形式——scalar question items (尺度化可能な質問項目) と rating method (評定法)——の選択、③調査の仮説的図式を文章の形で表現する独自の技法であるマッピング・センテンス (Mapping Sentence) とストラクタプル (Structuple) の構成。

2. ファセット・アナリシス (Facet Analysis)

仮説検証型のデータ分析の技法、例えば「尺度分析 (Scalogram Analysis: Scale Analysis)」「部分スケログラム分析 (Partial Order Scalogram Analysis: POSA)」「多重スケログラム分析 (Multidimensional Scalogram Analysis: MSA)」「最小空間分析 (Smallest Space Analysis: SSA)」「中央値回帰分析 (Median Regression Analysis)」などの開発。

3. ファセット・セオリー (Facet Theory)

質問紙調査に対する回答として捉えられる人間行動の諸法則とその理論的根拠の定式化: 第1の法則、第2の法則、多調回帰の法則などの構築。

(1) 第1の法則

第1の法則とは、「態度 (attitude)」や「関与 (involvement)」などの人間行動 (主要素: principal component) については、それぞれについての諸項目間の関係は単調関係を示し、相関係数はプラス (あるいは、せいぜいゼロ) となり、マイナスにはならないというものである。

例えば、政治学の領域でなされてきた人びとの政治関与に関する調査研究では、「ある仕方で政治に関与する人は、他の仕方で政治に関与する傾向がある」という知見 (finding) が見出され、そこから「政治関与の累積性」という経験的一般化 (empirical generalization) が導かれてきた (Lester W. Milbrath. *Political participation: How and Why Do People Get Involved in Politics?* Rand McNally & Company, 1965.) が、これも政治学の領域の固有の法則というよりも、Guttman の第1の法則の1つの事例にすぎないといわなければならない。

さらに、コミュニケーション行動の研究領域で検証されてきた「あるメディアでコミュニケーションをする人は、他のメディアでもコミュニケーションをする傾向がある」という命題も、この法則の1事例にすぎないと考えられる (真鍋一史『国際イメージと広告』日経広告研究所, 1998年)。

こうして、社会科学の研究においても、これまで多くの重複的研究 (redundancy) がなされてき

たことがわかる。第1の法則の定式化によって、このような問題に対する1つの解決策が提示されたともいえるのである。

(2) 第2の法則

第1の法則が、質問諸項目間の関係 (Pearson の「相関係数」や Guttman の「弱単調性係数」) がすべてプラスになるというその関係の「(プラス-マイナスの) 符号 (sign)」に関する法則であるのに対して、第2の法則は、その関係の「(大小の) 大きさ (size)」に関する法則である。この法則が「領域の法則 (Regional Law)」と呼ばれるのは、「最小空間分析——相関行列に示された n 個の項目間の関係を m 次元 ($m < n$) の空間における n 個の点の距離の大小によって示す方法であり、相関が高くなるほど距離は小さくなり、逆に相関が低くなるほど距離は大きくなる——」の描き出す幾何学的形状 (configuration) によって、それら諸項目間の関係の構造が視覚的に空間の領域 (region) として捉えられるからである。Guttman は、多くの大規模な質問紙調査のデータを用いて、さまざまな Regional Laws を構築してきたが、それらはすべてつぎの点から派生してきたものである。質問諸項目の内容 (domain) についてのファセットの諸要素 (element: Guttman の独自の用語では struct) は、それと同数の regions に分割される SSA の空間に対応する。ファセット (の諸要素) が空間の分割において果たす役割には3つの種類がある。ファセットがランク・オーダー (rank order: 賛-否、好-嫌、高-低、大-小などの1次元的な順序) を持たないのである場合は polar、ファセットがランク・オーダーを持つものである場合は modular か axial というのがそれである。前者に対応する理論は Circumplex、後者に対応する理論は Simplex と呼ばれる。こうして、このファセットの3種類の役割が組み合わせられて、交差する分割線が cylinder (円筒形)、cone (円錐形)、sphere (球形)、cube (立方体) のような幾何学的な形状を描くことになる。それぞれの形状に対応する理論は Cylindrex、Conex、Spherex、Multiplex と呼ばれる。また modular と polar が組み合わせられた形状に対応する理論は Radex と呼ばれる。

ファセットの役割	→ 空間の分割	
Polar	共通の原点からの区分線が円をいくつかのくさび形(V字型)に分割する。	
Modular	共通の原点のまわりにいくつかの同心円を描いて空間を分割する。	
Axial	矩形をいくつかの小さな矩形にスライスするように分割する。	

図2 ファセットの役割と regions との対応関係

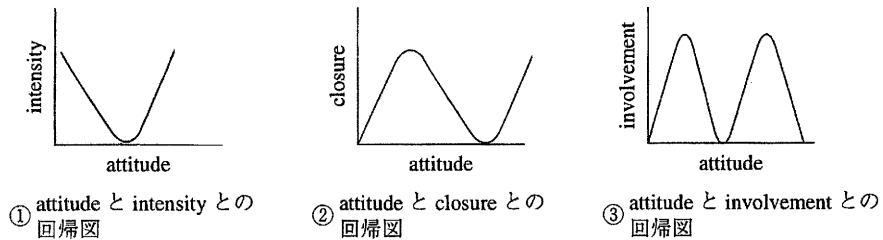


図3 多調回帰の法則

(3) 多調回帰の法則

これは異なる種類の間行動(主要素)の相互間の関係についての法則である。具体的にいうならば、intensity(強度)、closure(開閉)、involvement(関与)は、attitude(態度)に対してそれぞれ多調関係となり、順にU字型、N字型、M字型の回帰(regression)を示すというものである。以下、それぞれのパターンをGuttmanのイスラエルにおける調査事例(図3の①②③)に沿って説明しておくたい。

①は「公務員に対する人びとの態度調査」の結果を示したものである。まず、公務員に対する否定的(非好意的)態度から肯定的(好意的)態度までの順位を横軸(左→右)にとる。つぎに、そのような態度がどの程度強いのかという intensity

の「弱い」から「強い」までの順位を縦軸(下→上)にとる。その結果、公務員に対して「否定的」および「肯定的」な態度の方でそのような態度の感じ方が強く、「中間的」な態度(具体的には「どちらともいえない」という選択肢)の方でそのような感じ方が弱いというU(あるいはV)字型の回帰図が描かれた。

②はイスラエルの独立戦争後の「兵士の除隊後の意向に関する調査」とおして見出されたものである。横軸には左から右へ除隊後も軍隊に残ることに対する否定的態度から肯定的態度までの順位、縦軸には下から上へ除隊後どうするかが「決めていない(open:開)から「決めていない(closed:閉)までの順位をとっている。回帰曲線がU(あるいはV)字型とならずにN字型と

なったのは、除隊後も軍隊に残ることに最も否定的な態度をとる者が、今後の意向について明言することは非難をまねくので、それができず、軍隊に残ることに否定的ではあるが、除隊後どうするかについてはまだ決めていないと答えるからであると解釈される。

③は「The Voice of Israel (イスラエルのラジオ放送) に対する態度と行動の調査」で用いられた2つの質問項目、「あなたはイスラエル放送はいいと思いますか (attitude)」と「あなたはイスラエル放送をどのくらい聴いていますか (involvement)」を、それぞれ横軸 (左から右へ否定的態度から肯定的態度) と縦軸 (下から上へ低関与から高関与) にとったものである。ここで回帰図は、U (あるいは V) 字型、N 字型のいずれでもなく、M 字型となっている。放送は「非常によい」とか「非常に悪い」とかの極端な意見を表明する人たちが、じつは放送を聞いていない人たちであるということがわかったのである。これは、つぎのように解釈される。放送を聞いていない人たちは、一般に、放送の評価について「どちらともいえない」という中間的な回答する。ところが、放送を聞いていない人たちが、何かはっきりした内容の発言をすれば、その発言は非合理的なものとならざるをえず、それは「肯定」あるいは「否定」のいずれの方向にせよ、極端なものになってしまうということである。Guttman は、このような傾向を「偏見の原理 (The Principle of Prejudice)」と呼んだ。

IV. 価値観研究

1. 研究成果の発表の形態

Guttman とその共同研究者による価値観研究の成果は、①ヘブライ語による2本の「調査報告書」、②英語による5本の「研究論文」、③英語による1本の「調査報告書」、④英語による1本の「研究計画書」に分けられる。ここで、「Guttman とその共同研究者」という表現をとったが、それは、Guttman は独自の理論と方法を創造しながらも、常にその研究は「共同研究」の形で進められたということによる。「価値観」というテーマについても、それは例外ではなく、ほぼすべての研

究成果が Shlomit Levy との共著の形で発表されている。したがって、本稿では、これらの文献にもとづいて、その成果をまとめていく。とくに、上述の②と③の文献を中心に取りあげる。

2. 研究の経緯

Guttman とその共同研究者による価値観研究は、上述の文献の①ヘブライ語による2本の「調査報告書」の場合を除いて、ヨーロッパ科学財団助成の「現代ヨーロッパ諸国における価値観の変容」と題する国際共同研究という形で行なわれた。この国際共同研究は、ヨーロッパ科学財団に「社会科学に関する特別委員会」(委員長は Ralf Dahrendorf) が作られ、この委員会の第1回会合(1976年3月)において、この研究テーマが採択されたことに始まる。こうして、国際共同研究では、ワークショップの形式で、方法論の検討、プリテストの実施、データの統計分析が継続的に行なわれた。なお、ワークショップに参加した調査機関は、イスラエル応用社会調査研究所をはじめ、スイスの社会学研究所(ベルン大学)、イギリスの社会調査研究所(バークベック・カレッジ)、スペインの世論調査研究所、アイルランドの経済・社会調査研究所と公共管理研究所、西ドイツの経営・管理研究所などであった。

ここで興味深いのは、Guttman とその共同研究者による価値観研究が、以上に述べてきたような国際共同研究を契機として実を結ぶことになったという事実である。筆者は、社会科学の領域における研究者の特定のテーマへの取り組みは、それぞれの研究者の「内発的関心」と「社会的機会」とが、いわば「車の両輪」となってなされるものであると論じてきた。確かに、Guttman とその共同研究者のこの事例も、このような拙論を裏付けるものといえるかもしれない。

ただ、筆者の視座からするならば、Guttman とその共同研究者の「内発的関心」は、いわゆる「フォーマル・セオリー (formal theory)」としての「ファセット・セオリー」の構築というところにあった。もちろん、Dahrendorf を中心とする特別委員会において、1970年代の当時であって、すでに「価値観の変容」というテーマが重要な研究課題として認識されていたということは、その

後の「ヨーロッパ価値観調査 (European Values Study)」の出現を先取りするものとして注目される。いうまでもなく、そのようなヨーロッパの価値観のリアリティは「収斂=共通化」と「拡散=多様化」のせめぎ合いという側面を持つものであった。しかし、Guttman とその共同研究者の問題関心は、そのような価値観の相剋をめぐる「特定領域理論 (substantive theory)」の構築をめざすものではなかった。

この点は、上述の文献のキーワードに焦点を合わせることで明らかとなる。それらは、例えば、つぎのようなものである。

- ・ core values of Western Europeans
- ・ fundamental values
- ・ core social values

これらの用語から、Guttman とその共同研究者は、ヨーロッパにおける価値観というテーマを取り上げる場合、「多様化」よりも、「共通化」というところに焦点を合わせることをとおして、その法則——「構造の法則 (Structural Law)」「領域の法則 (Regional Law)」「空間の法則 (Spatial Law)」——の定立という方向に向かったことが納得できるのである。

Guttman とその共同研究者の「価値観研究」におけるもう1つの特徴として、「国際比較」あるいは「比較文化」への志向性があげられる。いうまでもなく、「現代ヨーロッパ諸国における価値観の変容」というテーマそのものが、このような視座に立つものであった。そして、一般に、このような「比較研究」においては、つぎの2つの目標が追及される。

- (1) 各国・各文化の個別的・特殊的な側面の詳細な観察・測定・記述。
- (2) 各国・各文化をとおして見られる一般化可能な命題・法則・理論の構築。

ここで、Guttman とその共同研究者がめざしたのは、(2) の方向であった。そして、そのために、すでに述べたように、その「価値観研究」においては、“fundamental values” “core values” と

いう用語で示されるものの、「価値観」のより「一般的・基底的・中心的」な側面に焦点を合わせたのである。こうして、Guttman とその共同研究者は、「知能 (intelligence)」「ウェル・ビーイング (well-being)」「適応 (adjust)」「恐怖 (fear)」「心配 (worry)」「抗議 (protest)」「ストレス (stress)」などのさまざまなテーマの場合と同様に、「価値観」というテーマについても、「質問紙法 (questionnaire method)」にもとづく実証的研究をとおして、「ファセット・アプローチの構築」をめざしたのである。

3. 研究の成果

(1) 文献研究とファセット・アプローチによる価値観の定義

Guttman とその共同研究者の「価値観研究」は、価値観というテーマをめぐる先行研究についての文献研究からスタートする。いうまでもなく、このような文献研究からのスタートは、社会科学の領域においても、常套的な方略となっている。

筆者も、「価値観」に関する 1940 年代以降の代表的な先行研究の収集・整理・検討にもとづいて、斯学の系譜・課題・展望に焦点を合わせて、「価値観の研究の視座」と題する論文をまとめた (慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』第 86 巻第 7 号、2013 年)。

しかし、同じく「価値観に関する文献研究」といながら、Guttman とその共同研究者による文献研究と、筆者による文献研究には大きな相違点が見られる。それは後者が、この研究領域を概観することをとおして、その全体的な視座と傾向を把握しようとしたのに対して、前者は、より戦略的に、そのような文献研究を、新しい価値観研究の実践的な方法——「ファセット・アプローチ」——の提案のための前提として位置づけた——具体的にいうならば、先行研究における問題の所在を明らかにした上で、そのような問題の解決のための新しい方法、つまり「ファセット・アプローチ」を提案した——ということである。

いうまでもなく、文献研究における上述のような 2 つの立場は、それぞれ意義のあるものといわなければならない。ただ、この点についての議論

は暫く措き、ここでは Guttman とその共同研究者によるそのような文献研究の具体的な進め方を見ていくことにする。

Guttman とその共同研究者は、このような文献研究を、価値観の概念の検討というところから始める。そこで、取りあげるのが、Robin M. William, Jr. の *International Encyclopedia of the Social Sciences* (1968) における、つぎのような記述である。

「価値観という用語は、興味 (interest)、喜び (pleasure)、好み (likes)、選好 (preferences)、義務 (duties)、道義的責任 (moral obligations)、願望 (desires)、欲望 (wants)、欲求 (needs)、嫌悪 (aversions)、魅力 (attractions)、そして、これら以外の多くの選択的オリエンテーション (selective orientation) の様式 (modalities) を示すものとして用いられる。」(Vol.16, p.283)

このような用法によるならば、「価値観」は、「準拠枠 (frame of reference)」という用語が意味する内的基準——人びとが物事を判断したり、行動を決定したりする際の内的基準——のほとんどすべてを含むことになる。

ここでは、William の例を検討した。しかし、このような傾向は、決して William だけのものではなく、ほかの多くの「価値観」の概念化の試みにおいても共通に見られるものである。それは、一言でいえば、「価値観という概念の内容はきわめて多様である」ということである。そして、そこから、この概念の「あいまいさ」という問題もでてくる。

では、このような問題は、どのようにして解決されるのであろうか。そのような解決策の提案のためには、何よりも「分析的な視座」が要求されることになる。それは、つぎの2点を明らかにすることである。

(i) なぜ、価値観という概念には、多様な内容が含まれることになるのであろうか。

(ii) では、価値観という概念をめぐるさまざまな定義においては、共通の「部分・側面・要素」といったところはないのであろうか。

まず、(i) については、それは、人びとが物事を判断したり、行動を決定したりする際には、さまざまな「事柄・側面・局面」がかかわってくるからにはほかならない。そこで、どのような「事柄・側面・局面」を観察・測定・分析に取りあげるかを、事前にリストアップしておかなければならない。Guttman とその共同研究者は、このような分析の枠組みを「ファセット・デザイン」という形で準備する。

つぎに、(ii) については、それは、価値観という概念には、それをどのように定義するにしても、ここだけは、「同じである」「共通である」「一定である」といった「部分・側面・要素」はないのであろうか、という疑問である。じつは、これまでの先行研究におけるさまざまな価値観の定義の検討をとおして、それが決してそうではないことがわかってきた。つまり、「同じである」「共通である」「一定である」ところが確かにあるのである。では、それは何かというと、さまざまな定義に含まれる「レンジ (range)」と呼ばれるところである。具体的にいうならば、価値観という概念の定義には、それがどのようなものであるにしても、そこには、例えば「～は重要である」「～は望ましい」「～は大切である」と表現される部分が含まれている。それは、「選択的オリエンテーション」「準拠枠」「内的基準」の「程度 (レベル)」といわれるものの具体的な表現である。そして、このような「部分」について、社会測定の研究領域では、「レンジ」という用語が用いられるのである。

この領域におけるこれまでの研究から、「レンジ」には2つの種類があることが確認されてきた。

①レンジが「ネガティブ」から「ポジティブ」までの方向を持ち、その中間のところにはゼロ・ポイントが位置するという種類。ここでの「価値観」がその例で、「～は重要でない」から「～は重要である」までの方向があり、両者の中間のと

ころに「どちらともいえない」というゼロ・ポイントがくる。

②レンジの一方の端のところにゼロ・ポイントが位置するという種類。その例として、「関与 (involvement)」があげられる。例えば、大学における学生の講義科目への出席回数というものを考えた場合、ある学生がその講義に一度も出席したことがなければ、その学生の「関与」は0で、その回数が増えるにつれて、1、2、3……となる。つまり、「関与」では、そのレンジの端のところにゼロ・ポイントがくる。

さて、以上の (i) と (ii) の2点についての議論を踏まえて、Guttman とその共同研究者は、価値観という概念について、独自の定義の仕方を提案する。それが、「ファセット・アプローチ」にもとづく「概念の定義」である。ここで注目すべきは、このような定義が、いわゆる「フォーマルな定義 (formal definition)」であるとともに、概念は「分析」されるだけでなく、「測定」されなければならない、という科学方法論の立場に立つものであるということである。それは、もう少し丁寧な言いならば、社会科学は「科学」でなければならない、そのような社会科学の科学科のためには、概念の検討は、いわゆる「概念分析」だけで終るのではなく、それは、その「操作化 (operationalization)」と「測定」にもとづく実証的な議論の展開に結びつけられなければならないと考える立場である。

こうして、Guttman とその共同研究者は、価値

観という概念の定義に当っては、概念の測定、とくに質問紙法という技法による人びとの価値観の測定、より具体的にいうならば、人びとの価値観はどのような質問諸項目 (とそのワーディング) によって実証的に捉えられるか、というところに焦点を合わせる。こうして作成された「ファセット・アプローチ」による「価値観」の定義は以下のとおりである。

いうまでもなく、このようなフォーマルな定義は、人間行動に関する研究者の広く深い洞察とイマジネーションがあって、初めて可能となるものである。同時に、そのような洞察とイマジネーションは、具体的な研究や社会的リアリティを離れて抽象的に存在するものではない。こうして、このフォーマルな定義が、Guttman と Levy による「イスラエルの高校生の価値観と態度」と題する共同研究 (1974、1976) において、初めて提示されたものであるという点は重要である。

繰り返しなるが、このような「ファセット・アプローチ」にもとづく価値観の定義は、何よりもまず価値観という概念が「多変量概念 (multivariate concept)」であることを前提としており、したがって、それは「ファセット・アプローチ」の用語でいえば、「多ファセット概念 (multifaceted concept)」として捉えられる。その定義は、「レンジ」の部分と、「人びとの物事の判断と行動の決定をめぐるさまざまな事柄・側面・局面」の部分とに分けられる。そして、先行研究で示された価値観のさまざまな定義においては、前者の「レンジ」の部分では「ネガティヴ→ポジテ

「ファセット・アプローチ」による「価値観」の定義

An item belongs to the universe of value items if and only if its domain asks for a (cognitive) assessment of the

A	B
importance of a	(cognitive) goal in a (affective) modality (behavioral) (instrumental)
C	
in life area (y) for	(itself as a) (a more primary) purpose in life area (z), (very important that it should) and the range is ordered from (to) (very important that it should not)
exist for that purpose.	

ィヴ」という共通のランク・オーダーの方向が設定されてきたものの、後者の部分、つまり、「ファセット・アプローチ」の用語でいえば、「ドメイン (domain)」と呼ばれる部分では、それぞれの定義ごとに、広くさまざまな「事柄・側面・局面」、つまり「ファセット・アプローチ」の用語でいえば、さまざまな「ファセット」のさまざまな「要素：エレメント (element)」が取りあげられてきた。こうして、その結果、価値観という概念の定義が多様なものとなってきたのである。

以上の基本的な考え方を踏まえて、つぎに Guttman とその共同研究者による価値観のフォーマルな定義について具体的に解説していく。このフォーマルな定義は、1つの「レンジ」と3つの「ドメイン」のファセットからなっている。

まず、前者の「レンジ」は、人びとが、ある事柄が「重要である」とするその判断であり、それは「認知的 (cognitive)」なものであると考えられている。そして、そのような判断には、「重要性」という点からして、「ネガティブ (全くそう思わない)」から「ポジティブ (とてもそう思う)」までのランク・オーダーが設定されるのである。

つぎに、後者の「ドメイン」は、A、B、C という記号がされる3つのファセットからなる。

ファセット A：ここで問われている「重要性」は何についての判断であろうか、何が「重要である」(あるいは「重要でない」というのかというと、それは「ある目標の達成 (achieving a certain goal)」ということである。そして、一般に、人びとが目標とするものは、「ある状況 (a situation)」である場合もあるし、「ある行動 (a behavior)」である場合もある。前者の具体的な例としては、「幸福」「平和」「平等」などが、後者の具体的な例としては、「人を愛する」「知識を学ぶ」「人を助ける」などが、それぞれあげられる。

ファセット B：このような目標としての「状況」や「行動」は、その「性質 (nature)」「様式 (modality)」「特徴 (character)」という点からす

るならば、「感情的 (affective)」「認知的 (cognitive)」「手段的 (instrumental)」という3つの側面が区別される。具体的な例は以下のとおりである。

感情的状況：幸福
 認知的状況：平等
 手段的状況：裕福
 感情的行動：人を愛する
 認知的行動：知識を学ぶ
 手段的行動：利潤をあげる

ファセット C：上にあげたような目標は、さらに、その目標が「第一次的 (primary) なもの」、つまり、そのこと自体が最終目標である場合と、その目標は「二次的 (secondary) なもの」、つまり、最終目標の達成のための手段である場合とがある。具体的な例をあげるならば、先にあげた「知識を学ぶ」という「認知的行動」としての目標は、「知識を学ぶこと」そのことが最終目標である場合もあるし、「よい職につくための手段」として位置づけられることもある。このフォーマルな定義が提示されたコンテキストからするならば、ここでの「最終目標」は、「国にとっての『よいこと』をめざす (for/toward the good of the country)」ということであろう。

ファセット (y) と (z)：このような目標の達成が想定される具体的な生活諸領域 (area of life) としては、家庭、友人、仕事、社会、政治、余暇、宗教などさまざまなものが考えられる。

さて、以上において、Guttman とその共同研究者による「ファセット・アプローチ」による価値観の定義についての考え方を紹介してきた。ここで重要なポイントは、価値観という概念をこのように定義するならば、『価値観』は『態度 (attitude)』の特別のケースである (“Value is a special case of ‘attitude’)” ということになるということである。それは、Guttman (in Gratch, 1973) の「態度」についての、同じく「ファセット・アプローチ」による定義を見れば明らかである。

すでに詳細に解説したように、「価値観」は、

「ファセット・アプローチ」による「態度」の定義

“An item belongs to the universe of attitude items if and

(cognitive)

only if its domain asks about behavior in a (affective)

(instrumental)

modality toward an object, and its range is ordered from

(very positive)

(to) toward that object.”

(very negative)

態度の場合と同様、特定の「対象 (object)」に対する「ネガティブ」から「ポジティブ」までの「レンジ」を持つものである。具体的にいうならば、「価値観」については、「～は重要であると思うか」と尋ねられ、それに対して「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの「レンジ」で答える形がとられる。つまり、ここでは「重要性」の「判断」という点に焦点が合わされているものの、「ネガティブ」から「ポジティブ」までの「レンジ」という、その「レンジ」の形そのものは、「態度」の場合と同じである。さらに、このような「判断」を、ここでは「認知的」なものであるとしているが、それは必ずしも「感情的」「手段的」な「判断」というものがありえないとしているのではない。

こうして、Guttman とその共同研究者は、その定義からして、「価値観」は「態度」の特別なケースであるとして位置づけるのである。

(2) 調査の質問文とマッピング・センテンス

Guttman とその共同研究者の価値観研究が、ヨーロッパ科学財団助成の「現代ヨーロッパ諸国における価値観の変容」と題する共同研究を契機として展開されたということについては、すでに述べた。そして、この共同研究は、一方において、その研究の基本的な枠組みは、「ファセット・アプローチ」という形で設定するとともに、他方において、その研究の具体的な形態は、「ワークショップの形式での方法と分析をめぐる議論」と「質問紙の作成・プリテストの試行・結果のデータ分析」を実践的・循環的・継続的に実施する、というものであった。

そこで、Guttman とその共同研究者による価値観研究のあとづけの作業は、以上のような共同研

究のプロセスを精査し、その結果を報告するという仕方で行なうこともできる。それはそれで、きわめて興味深いモノグラフ研究となるであろう。そして、その結果は、「ファセット・アプローチ」の方法論的な確立という科学史のテーマにつながっていくであろう。

さらにいえば、研究と呼ばれる人間の知的営為の意義は、その「成果」だけによって決まるものではない。じつは、その「過程」のもたらすものも看過できない。ここでの共同研究の例でいえば、それは、この研究が「ワークショップ」と「質問紙作成・プリテスト・データ分析」を繰り返し行なうという形でなされたということであり、それをとおして「共同研究のあり方」についてのさまざまな貴重なノウ・ハウが蓄積されたということである。ちなみに、これまで日本においては、梅棹忠夫『研究経営論』岩波書店、1989年や田中一『研究過程論』北海道大学図書刊行会、1988年などの著作はあるものの、研究のこのような側面についてのノウ・ハウの蓄積は少ない。

しかし、Guttman とその共同研究者の価値観研究のあとづけというテーマについての本稿の関心・視座・ねらいは、上述のそれらとは異なる。すでに述べたように、Guttman とその共同研究者の価値観研究が、いかにして「ファセット・アプローチ」によって導かれるとともに、価値観研究の成果をとおして、いかにして「ファセット・アプローチ」が築かれていったかを明らかにするというのが、本稿のめざすところである。

したがって、ここでは、このような本稿の目標との関連性が明らかである場合にかぎって、この国際共同研究の「過程」の「出来事」についても記しておくことにする。そのために、つぎの2つ

の文献を取りあげる。

Shlomit Levy and Louis Guttman. *A Structural Analysis of Some Core Values and Their Cross-Cultural Differences*. The Israel Institute of Applied Social Research. 1981.

Shlomit Levy and Louis Guttman. *A Faced Cross-Cultural Analysis of Some Core Social Values*. In David Canter (ed.). *Facet Theory*. Springer-Verlag. 1985.

第1文献は、以上の国際共同研究の過程でなされたイスラエルにおけるプリテストの結果のデータ分析について報告するものであり、第2文献は、さらにスイスにおけるプリテストの結果を取りあげて、イスラエルとの国際比較の視座からデータ分析を試みたものである。

そこで、この国際共同研究の「過程」の「出来事」として、以下の2点について記しておきたい。ちなみに、イスラエルのプリテストの51の質問項目のうち、1~5と17~27の16項目は、もともとイギリスの研究チームによって提案されたものであり、これら2種類の質問諸項目をめぐって方法論的な議論が展開されることになったのである（Appendix の質問文を参照されたい）。

①まず、1~5の質問諸項目は、「ファセット・アプローチ」からするならば、「関与」に分類されるべきもの——より詳細に議論するならば、質問項目の1は *norm for involvement* に分類されるべきもの——である。それにもかかわらず、イギリス・チームは、これらの諸項目は「価値観」を捉えるものであると考えた。このような考え方は、いわばこれまでの *conventional* な考え方に立つものであっても、「ファセット・アプローチ」の考え方にもとづくものではない。すでに解説したように「ファセット・アプローチ」の枠組みからするならば、「価値観」と「関与」はその「レンジ」の形において全く異なる——前者がゼロ・ポイントを真ん中において「ネガティヴ」から「ポジティヴ」までの方向を示すのに対して、後者は一方の端にゼロ・ポイントが位置する——。こうして、「ファセット・アプローチ」の視座からするならば、「価値観」と「関与」との「関係

性——*monotone* ではなく、*polytone* の関係の可能性が示唆される——」の分析こそが、きわめて興味深い研究課題となってくるのである。

②つぎに、17~27の質問項目は、イギリス・チームによって提案されたものであるにもかかわらず、その調査報告書においては、「これの質問項目は成功したものではなかった (*these items are not successful*)」と書かれている。イギリス・チームが、なぜそのように書いたかというのかは明確でない。しかし、ここで重要なポイントは、イギリス・チームが「成功したものではなかった」とした質問諸項目について、Guttman とその共同研究者がデータの再分析をした結果、それらの諸項目が、「価値観に関する理論」——ここでは、「価値観に関するファセット・セオリー」——の展開という視座からするならば、きわめて「成功したものである」ことがわかったということである。つまり、このことは、同じ調査データといえども、それが側面から見た場合には、「成功したものでない」と判断されるとしても、別の側面から見た場合には、「成功したものである」と判断されることがありうるということを示しているのである。

さて、ここで取りあげた国際共同研究が、その研究の「過程」において、以上のようないわば副産物ともいべきものをもたらすことになったということを確認した上で、つぎに Guttman とその共同研究者による「価値観のファセット・アプローチ」の展開の第2の段階について述べていく。

すでに述べたように、そのような展開の第1の段階は、「価値観という概念の定義」であった。そして、このような定義にもとづいて、つぎに、では、そのような価値観に関する実証的な調査研究で取りあげる具体的な質問諸項目の「分類スキーム (*classification scheme*)」を、どのように構成 (*construct*) するかという問題がでてくる。この「どのように」という点について、つぎの2点が指摘できる。

①このような「分類スキーム」は、Guttman によって考案された「マッピング・センテンス (*Mapping Sentence*)」の形で表示される。「マッ

ピング・センテンス」をめぐる方法論的な議論は、ここでは取りあげない。この点については、Shye (1978)、Levy (1994)、Shye, Elizur and Hoffman (1994)などを参照されたい。

②ただ、ここで、どうしても指摘しておかなければならない点がある。それは、このような国際共同研究が、「価値観の構造」についての実証的研究をめざしており、そのような「価値観の構造」をめぐる仮説的なモデルが「マッピング・センテンス」の形で示されるということである。こうして、Guttmanとその共同研究者の「価値観研究」の目標は、その「構造モデル」の構築ということであり、「因果モデル」の構築ということではない。

③再び共同研究の運営という面にかかわることであるが、そのような「マッピング・センテンス」が提案される場合は、それが究極のものとしてというよりも、むしろ「ワーキング・マッピング・センテンス」として提出される。つまり、そのような「マッピング・センテンス」は、研究の進展にともなって、いくらでも修正 (correction)・改良 (improvement)・追加 (addition) が可能なものとされているということである。

さて、以上を踏まえて、イスラエルにおけるプリテストの「マッピング・センテンス」は、3種類のファセットで構成された。

①Xの記号で表示されるプリテストの「対象

者 (被調査者)」のファセットである。文献1によれば、このプリテストの対象者は、都市在住の20歳以上のユダヤ人男女549人である。

②AとBとCの記号がつけられている3つのファセットは、質問の「内容」を分類するためのファセット (domain facet と呼ばれる) である。

まず、Aのファセットは、3つのエレメントからなる。

A1は、「個人志向的な行動・自己本位的な行動・利己的な行動・求心的な行動」であり、例えば、「快適に暮らす」「感情のままにふるまう」「不安を感じない」「美を楽しむ」などがそれである。

A2は、「他者志向的な行動・対人関係的な行動・利他的な行動・遠心的な行動」であり、「他者を理解・援助する」「両親を敬う」「政治的な権威を尊ぶ」「行為の結果を勘案する」などがその例である。

A3は、「個人を越えた倫理・規範・信仰にかかわる行動」で、その例として「何がよくて、何がわるいかについて同意する」「神を信じる」などがある。

つぎに、Bのファセットは、2つのエレメントからなる。ここでもファセットBは、価値観の視座から判断される人間行動のファセットである

イスラエルにおけるプリテストの「マッピング・センテンス」

The extent to which respondent (x) assesses the importance for his or her country that most of its people have

<u>A</u>		<u>B</u>
(1. personal [egotistic])		(1. general) aspect
(2. interpersonal [altruistic]) oriented values (behaviors) with respect to a		(2. specific)
(3. impersonal [shared])		
<u>C</u>		<u>R</u>
(1. work)		(low)
(2. family)		(to) importance
(3. politics and government)	→	(high)
of life area (4. social)		
(5. security))		
(6. religion and ethics)		
(7. living and leisure)		
(8. in general)		
for the good of his or her country.		

が、B1がそのような人間行動のより「一般的側面」に焦点を合わせるのに対して、B2はより「特殊的側面」に焦点を合わせる。例えば、すでに説明した「個人志向的行動」の場合でいえば、「美を楽しむ」がより「一般的な行動」であるのに対して、「快適に暮らす」はより「特殊的な行動」であるといえる。

さらに、Cのファセットは、さまざまな人間行動がなされる具体的な生活諸領域についてのファセットである。それは、ここでは、具体的に「仕事」「家庭」「政治」「社会」「安全」「宗教・倫理」「生活・余暇」「一般」の8領域の要素に分けられている。

③矢印に続くRの記号で示されている最後のファセットは、AとBとCのファセットで分類された人間行動が、「国」の「よい状態」という点からして、「重要であるかどうか」の「レンジ」——つまり、その「重要性」についての「ネガティブ」から「ポジティブ」までの「レンジ」——である。

以上が、イスラエルにおけるプリテストの「マッピング・センテンス」を構成するファセットと、その要素についての解説である。ファセットAは3つの要素、そしてファセットBは2つの要素、さらにファセットCは8つの要素で構成されている。これら個々の要素は「ストラクト (struct)」と呼

ばれる。フランスの哲学者デカルト (René Descartes) の「分析・分割の規則」にもとづいて、これら要素の組み合わせのセットは「デカルト・セット (Cartesian Set)」と名付けられる。ここでの例でいえば、それは $3 \times 2 \times 8 = 48$ となる。この48とおりの組み合わせのそれぞれが「ストラクタブル (structuple)」と呼ばれる。

以下において、プリテストの11の質問項目が、それぞれのファセットのどの要素の組み合わせでできているかを示した対応表 (表1) をあげておく。

(3) 調査のデータ分析

ここで「データ分析」という場合、いうまでもなく、それは「ファセット・アナリシス」ということを意味している。そして、そのような「データ分析」が何をめざしているかということ、それは、Guttmanの最晩年の論文“Recent Structural Laws of Human Behavior” (*The Bulletin of the Institute of Communication, Keio University*, 14, 1980) に端的に示されているように、Structural Laws of Human Behavior、具体的にいうならば、質問紙調査への回答という仕方で捉えられる「人間行動」に見られる「構造の法則」の発見と蓄積と、そしてその体系化、つまりは、「ファセット・セオリー」の構築ということである。そして、その同じ線上で価値観研究の場合においても、Guttmanとその共同研究者の「データ分析」は、「価値観の構造」の実証的な解明と、「ファセット・セオリー」の確認 (confirmation) をめざすも

表1 価値観に関する質問諸項目とストラクタブルとの対応表

Question	Domain structuple
For the good of the country, it is important that most people in (name of country) :	
Work hard	a ₂ b ₂ c ₁
Understand and help others	a ₂ b ₂ c ₄
Honor their parents	a ₂ b ₂ c ₂
Believe in God	a ₃ b ₂ c ₆
Respect the authority of the governing bodies	a ₂ b ₂ c ₃
Live comfortably	a ₁ b ₂ c ₇
Feel secure	a ₁ b ₂ c ₅
Enjoy beauty	a ₁ b ₁ c ₇
Make an accounting of the benefits and costs of their deeds	a ₂ b ₁ c ₄
Behave according to feelings	a ₁ b ₁ c ₈
Agree on what is good and what is evil	a ₃ b ₁ c ₆

のとなる。

このような「データ分析」の目標に合わせて開発された技法が、(i)「弱単調性係数 (Weak Monotonicity Coefficient) のマトリックス」と、(ii)「最小空間分析」である。

以下においては、この2つの技法による「データ分析」の結果を示し、その「読み取り」について解説する。なお、ここでは、それぞれの技法のテクニカルな解説を行なう紙面の余裕がない。この点については、つぎの文献を参照されたい。

Reuven Amarr and Shlomo Toledano. *Hudap Manual with Mathematics and Windows Interface (Second Edition)*. The Hebrew University of Jerusalem. 2001.

(i) 弱単調性係数マトリックス

一般に、「n 個の項目の相互間のすべての単純相関係数を n×n のマトリックスの形に示したものを」を相関マトリックスという。Guttman は、項目間の関係の測度として、Pearson の「積率相関係数」に代わるものとして、「弱単調性係数」を考案した。このような「マトリックス」からの知見の「読み取り」は、①弱単調性係数の「プラス・マイナスの符号」の検討と、②弱単調性係数の「数値の大きさ」の検討、をとおして行なわれる。

①弱単調性係数の「+-の符号」の検討

プリテストの質問諸項目の相互間の関係を示した表2の「マトリックス」を見るならば、マイナスの符号のついた2つのケースがあるものの、それら以外のケースでは、符号はプラスとなっていることがわかる。さらに、マイナスの符号のついてる2つのケースについては、それらの弱単調性係数の数値は、-0.07 と -0.03 とゼロに近い値であることがわかる。この結果からは、プリテストの質問諸項目についても「第1の法則 (The First Law)」が成り立つことが示唆される。

第1の法則とは、「態度 (attitude)」「知能 (intelligence)」「関与 (involvement)」などについて質問紙法で調査する場合、そのような質問項目への回答という形で捉えられる人びとの行動については、それぞれの項目間の関係は単調関係を示し、弱単調性係数はプラス (あるいは、せいぜいゼロ) となり、マイナスにはならないという法則である。Guttman とその共同研究者は、このような法則が成り立つための「条件」について検討し、それを、

(a) 「態度」なら「態度」、「関与」なら「関与」というように、同一の種類の人間行動に関する質問諸項目であること、

(b) それら質問諸項目はいずれも同一の対象 (object) についての質問諸項目であること、

(c) それら質問諸項目の意味内容が相互に類似

表2 価値観に関する質問諸項目の相互間の関係——「弱単調性係数」——

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
For the good of the country, it is important that most people in (name of country) :											
1. Work hard	—	31	31	05	14	-07	-03	04	08	02	07
2. Understand and help others	31	—	69	35	30	30	55	38	45	06	19
3. Honor their parents	31	69	—	63	35	34	45	56	42	22	36
4. Believe in God	05	35	63	—	16	14	17	17	34	22	29
5. Respect the authority of the governing bodies	14	30	35	16	—	19	32	05	17	00	04
6. Live comfortably	-07	30	34	14	19	—	69	48	24	45	23
7. Feel secure	-03	55	45	17	32	69	—	47	43	23	25
8. Enjoy beauty	04	38	56	17	05	48	47	—	52	40	35
9. Make an accounting of the benefits and costs of their deeds	08	45	42	34	17	24	43	52	—	19	41
10. Behave according to feelings	02	06	22	22	00	45	23	40	19	—	42
11. Agree on what is good and what is evil	07	19	36	29	04	23	25	35	41	42	—

*Decimal points omitted

(対立ではなく) したものであること、

(d) 調査対象者が無作為 (random) に抽出されたサンプルであること、
という4つにまとめ、この法則を定式化した。

以上のような、この法則の定式化を踏まえて、Guttman とその共同研究者は、プリテストの質問諸項目については、「第1の法則」が成り立つことを予期 (anticipate) することはなかったという。それは、(b) の条件、つまり、プリテストの質問諸項目が1つの共通の対象 (a common object) を持っているかどうかについては、確証がなかったからである。この点について、もう少し説明するならば、それはつぎのとおりである。

ここでの質問諸項目は、多くの人びとが「よく働く」「他者を理解する」「神を信じる」などの行動をすることが、「国の『よさ』 (the good of the country)」という点からして、「重要である」と考えるかどうか——これが「価値観」とされている——を尋ねるといふ形をとっている。つまり、ここで、「国の『よさ』」というのは、重要性の判断の「対象」ではなく、そのような判断をするための「基準 (criterion)」ともいうべきものである。「国の『よさ』」という基準からする、ある「人間行動」の「重要性」の判断という場合、いうまでもなく、そのような「人間行動」が、「重要性」の判断の「対象」とされているのであって、決して「国『よさ』」が、「重要性」の判断の「対象」とされているわけではない。それが、いわば、事前の問題の設定であった。しかし、この問題について、事後に——つまり、調査結果が示された後に——再度、考えてみるならば、ここで尋ねられている「よく働く」「他者を理解する」「神を信じる」などの11の「人間行動」が、結局は1つの方向に向けられたものであったといわざるを得ないことがわかる。そして、そのような方向とは、調査の回答者たちがそこで日々の生活を送り、それぞれの生を全うするところの全体社会、つまりは「イスラエルという国」ということになるのではなからうか。そうだとするならば、ここでの質問諸項目については、それらの質問諸項目の構文上の意味内容を越えた、いわば「全体包含的 (holistic)」とも表現されるべき意味内容——つまり、「イスラエルという国がよくなる」

という意味内容——が醸し出されているといわざるをえないであろう。このように理解して、初めて「第1の法則」が、これらの質問諸項目の相互間の関係についても成り立つことの「理論的な根拠 (rationale)」を確認することができるのである。

以上の点は、「ファセット・アプローチ」の発展という視座からするならば、このような価値観というテーマをめぐるプリテストのデータ分析において、初めてその問題の所在が明らかになったのであり、このような研究の機会がなければ、予期することのなかった「第1の法則」の成立条件に関する新たな発見であったという意味で、この価値観研究が「ファセット・アプローチ」に貢献する1つの重要な側面といえることができるのである。

②弱単調性係数の「数値の大きさ」の検討

プリテストの質問諸項目の相互間の関係を示した「マトリックス」において、弱単調性係数の数値は、最も大きいものが0.69、最も小さいものが0.00となっている。そして、「0.30以上の相対的に大きな値の係数」の数と「0.30未満の相対的に小さな値の係数」の数をくらべてみるならば、両者がほぼ等しいことがわかる。しかし、「0.10未満のきわめて小さな係数」の数は相対的に少ない。

ところで、ここでの質問諸項目は、人びとの「価値観」を捉える目的で作成されたものである。そうであるからして、これらの質問諸項目は「同一内容」を含むはずのものである。では、実証的な観点からして、「マトリックス」の係数が、どのくらいの値であれば、これらの質問諸項目は、確かに「同一内容」を持つものであるといえるであろうか。この点については、必ずしも一定の基準があるわけではない。しかし、データ分析のいわば「経験則 (a rule of thumb)」ともいうべきものからして、ここでの数値は、質問諸項目が同一内容を含むものである可能性を示していると考えてさしつかえないであろう。

(ii) 最小空間分析 (Smallest Space Analysis : SSA)

以上においてマトリックスの形で示された個々

の「弱単調性係数」の「符号」と「数値」の検討にもとづいて、そこに見られる傾向の読み取りを行なった。しかし、このような方法による「構造分析」には、どうしてもつぎのような問題が残される。それは、この方法では「マトリックス」に示された個々の「弱単調性係数」が一對ごとの項目間の関係の測度にとどまるものであり、それぞれの傾向の読み取りがどこまでも個々に独立したものに終わらざるをえないということである。そこで、これら個々の独立した傾向を、いわば背後で関係づけている「基底的な側面」を抽出するデータ分析の技法が、要請されることになる。このような要請にこたえる技法が「最小空間分析」である。

「最小空間分析」は、「多次元尺度構成法 (multidimensional Scaling)」の系列に属し、「マトリックス」の形で示された n 個の項目間の関係を m 次元 ($m < n$) の空間における n 個の点の距離の大小によって示す方法である。相関が高くなるほど距離は小さくなり、逆に相関が低くなるほど距

離は大きくなる。通常は諸項目間の関係を視覚的に描写するために2次元(平面)あるいは3次元(立体)の空間布置が用いられる。

図4は、「ユークリッド空間 (a Euclidian Space)」にプリテストの質問諸項目の番号がプロットされた2次元のSSAマップである。そして、このSSAマップには、実線と、点線と、半円が描かれており、さらにそれぞれの項目番号に近いところに、その項目に対する肯定的な回答(「とてもそう思う」+「そう思う」)の%も表示されている。

まず、後者については、最小空間分析の結果と単純集計(度数分布)の結果とは、基本的には全く無関係のものであり、それぞれからの知見の読み取りは、相互に独立して行なわれてしかるべきものであるということが示唆されている。

つぎに、前者については、それは、Guttmanとその共同研究者が「ファセット・セオリー」の「経験的な法則 (empirical law)」にもとづいて、これら諸項目の「空間布置」を、ここに描かれた

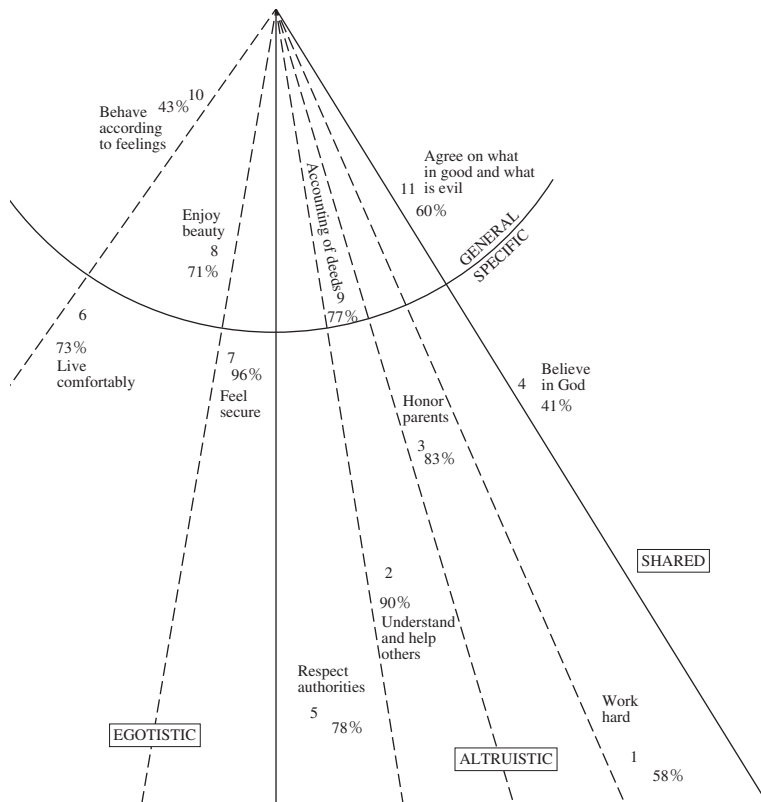


図4 価値観に関する質問諸項目のSSAマップ—Radex—

ような「空間分割」に仕上げた結果ということが出来る。そして、その結果の示す幾何学的な形状 (configuration) は、Radex の一部をなすものとなっていることがわかる。Radex については、つぎの文献を参照されたい。

Shlomit Levy (ed.) *Louis Guttman on Theory and Methodology: Selected Writings*. Dartmouth. 1994.

David Canter (ed.) *Facet Theory: Approaches to Social Research*. Springer-Verlag. 1985.

Samuel Shye (ed.) *Theory Construction and Data Analysis in the Behavioral Sciences*. Jossey-Bass Publishers. 1978.

岡路市郎、福島正治「ラデックス論」三好稔編『心理学と因子分析』、誠信書房、1962年。

以下においては、この Radex の形状を構成する2つの側面について、より具体的に解説していく。

さて、プリテストの質問諸項目は、「マッピング・センテンス」の形で示された「分類スキーム」にもとづいて、A、B、Cの記号が付された3つの内容のファセットに分けられる。ここでは、AとCのファセットが、どちらも、それぞれを構成するエレメントの間に「ランク・オーダー」を設定することのできないファセットであるのに対して、Bのファセットは、一方の「general」と他方の「specific」というように、両者の間に一定の「ランク・オーダー」を設定することができるファセットである、という点が重要なポイントとなる。つまり、「ファセット・セオリー」からするならば、「ランク・オーダー」が設定できるファセットは「modularの役割」を果たし、「ランク・オーダー」が設定できないファセットは「polarの役割」を果たすことが予想される。そして、ここでのSSAマップを見るならば、確かにそのような予想どおりの結果となっていることがわかるのである。

まず、ファセットAは、「マッピング・センテンス」からするならば、1. Personal (egotistic) oriented behavior、2. Interpersonal (altruistic) ori-

ented behavior、3. Impersonal (shared) oriented behavior、の3つのエレメントに分けられているが、これら3つのエレメントには、「高-低」「大-小」「上-下」などの「ランク・オーダー」をア・プリオリ (a priori) に考えることはできない。そして、SSAマップにおいては、これらの「エレメント」に対応する諸項目は、半円をその中心 (原点) から出る放射状の2つの実線が分割する3つの扇形 (あるいはくさび形) の領域内にプロットされている。つまり、このことから、ファセットAは「polarの役割」を果たしていることがわかるのである。

つぎに、ファセットCは、同じく「マッピング・センテンス」からするならば、1. 仕事 2. 家庭 3. 政治 4. 社会 5. 安全 6. 宗教・倫理 7. 生活・余暇 8. 一般、の8つの「エレメント」に分けられているが、これら8つの「エレメント」についても「ランク・オーダー」をア・プリオリに考えることはできない。そして、SSAマップでは、同じように、これらの「エレメント」に対応する諸項目が、2本の実線と5本の点線によって分割される8つの扇形 (あるいはくさび形) の空間領域内に、右から左へ、「6. 宗教・倫理」「1. 仕事」「2. 家庭」「4. 社会」「3. 政治」「5. 安全」「7. 生活・余暇」「8. 一般」の順でプロットされていることがわかる。このことは、ファセットCが、同じように「polarの役割」を果たしていることを示している。

さらに、ファセットBは、1. generalと2. specificの2つの「エレメント」に分けられている。このファセットは、ここで、「重要であるかどうか」という判断の対象として取りあげるさまざまな人間行動を、それらが「一般的 (general) なレベルのもの」であるか、それとも「特定の (specific) なレベルのもの」であるかという点から区別するものであり、したがって、これら2つの「エレメント」は「ランク・オーダー」を持つものといえる。そして、SSAマップにおいては、「1. general」な諸項目が内側の同心半円の領域内に、「2. specific」な諸項目が外側の同心半円の領域内に、それぞれプロットされている形となっている。このことは、ファセットBが「modularの

役割」を果たしていることを示している。

ちなみに、この SSA マップでは、その形状が、「円」ではなく、「半円」となっていることについては、「ファセット・セオリー」からするならば、ここで分析に取りあげられている「質問項目」の数と、それを分類する枠組みとしての「エレメント」の数が十分でなかったことによるものと考えられる。

こうして、以上の「polar の役割」と「modular の役割」が1つに合わさって、SSA マップの空間に、Radex——より正確に言えば、Semi-Radex——の形状が描かれる結果となったのである。こうして、この結果は、「価値観」という人間行動についても、「ファセット・セオリー」が確認されることを示しているのである。

V. おわりに

本稿では、Guttman とその共同研究者による「ファセット・アプローチの構築」と「価値観研究の成果」を、関連文献にもとづきながら、詳細にあとづけていくことを試みた。

では、そのような「あとづけの試み」から、何が確認されたかという点、それは、両者が文字どおり「切っても切れない」関係にあるということである。具体的にいうならば、一方で、「価値観研究」に「ファセット・アプローチ」を導入することで、先行研究とは異なる視座から「価値観研究」がより豊饒なものとなるとともに、他方で「ファセット・アプローチ」の1つの事例研究として「価値観研究」に取り組むことで、「ファセット・アプローチ」がより頑健なものとなる、ということである。

では、なぜ、それはそうなのかという点、その答えは、「ファセット・セオリー」の性格にある、ということになる。繰り返しなるが、「ファセット・セオリー」は「フォーマル・セオリー」の性格を持つものであり、したがって、それはどのような「特定領域理論」——ここでの例で言えば、「価値観理論」というもの——とも対立するものではない。むしろ、そのような「特定領域理論」

が、「ファセット・アプローチ」の導入によって、より明細化・精緻化・体系化されることになるのである。

こうして、「ファセット・アプローチ」にもとづく「価値観研究」は、社会科学の領域における「知の創造・蓄積・統合」という点からして、きわめてプロミシングなものであるといわなければならない。

しかし、それにもかかわらず、現代社会論の視座からするならば、そこに問題なしとしない。Max Weber のいう「社会学の発想を支えるのは時代における人間性の運命いかんという問いである」（田中義久「現代社会学における個人と社会」Edward A. Tiryakian『個人と社会』、解説論文、みすず書房、1971年、314頁）という認識に立つならば、現代における価値観の問題は決してGuttman の「人間行動の法則」の枠内の分析だけでよしとされるものではない。例えば、現代のようなグローバル化の時代においては、一方で地球規模で共通になっていく価値観の方向と、他方でそれにもかかわらずやはりそれぞれの国、地域、人間集合体ごとに守っていこうという価値観の方向とがせめぎ合うことになる。このようなテーマは、現代の社会学にとって、きわめてアクチュアルな問題となってきた。では、このような問題に対して、「ファセット・アプローチ」は、どのように取り組んでいくことができるであろうか。それは、今後に残された最も重要な課題の1つであるといえよう（Manabe, 2016）。

文献

- Amarr, Reuven and Toledano, Shlomo (2001). *Hudap Manual with Mathematics and Windows Interface* (Second Edition). The Hebrew University of Jerusalem.
- Canter, David (ed.) (1985). *Facet Theory: Approaches to Social Research*. Springer-Verlag.
- Gratch, Haya (ed.) (1973). *Twenty-Five Years of Social research in Israel*. Jerusalem Academic Press.
- Guttman, Loius (1980). Recent Structural Laws of Human Behavior. *The Bulletin of the Institute of Communication*. Keio University. 14.
- 木村通治、真鍋一史、安永幸子、横田賀英子 (2002). 『ファセット理論と解析事例』ナカニシヤ出版。
- Levy, Shlomit and Guttman, Louis (1974). *Values and At-*

- titudes of Israeli High School Youth. First Research Report.* Israel Institute of Applied Social Research (Hebrew).
- Levy, Shlomit and Guttman, Louis (1976). *Values and Attitudes of Israeli High School Youth. Second Research Report.* Israel Institute of Applied Social Research (Hebrew).
- Levy, Shlomit and Guttman, Louis (1981 a). Two Examples of Value Analysis: Social Control and Amenities. In Ingwer Borg (ed.), *Multidimensional Data Representations: When and Why.* Mathesis.
- Levy, Shlomit and Guttman, Louis (1981 b). Structure and Level of Values for Rewards and Allocation Criteria in Several Life Areas. Ingwer Borg (ed.), *Multidimensional Data Representations: When and Why.* Mathesis.
- Levy, Shlomit and Guttman, Louis (1981 c). *A Structural Analysis of Some Core Values and Their Cross-Cultural Differences.* The Israel Institute of Applied Social Research.
- Levy, Shlomit and Guttman, Louis (1985). A Faceted Cross-Cultural Analysis of Some of Core Social Values. In David Canter (ed.), *Facet Theory: Approached to Social Research.* Springer-Verlag.
- Levy, Shlomit (1990). Values and Deeds. *Applied Psychology: An International Review.* 39(4).
- Levy, Shlomit (1992). Use of Facet Theory in Developing Value Theory for Communal Wellbeing: A Cross-Cultural Example. In H. Klages et al. (eds.), *Werte und Wandel.* Frankfurt/Main: Campus Verlag.
- Levy, Shlomit (1994). *Louis Guttman on Theory and Methodology: Selected Writings.* Dartmouth.
- 真鍋一史 (1993). 『社会・世論調査のデータ解析』慶應義塾大学出版会.
- 真鍋一史 (1998) 『国際イメージと広告』日経広告研究所.
- Manabe, Kazufumi (2001). *Facet Theory and Studies of Japanese Society.* Bier'sche Verlagnsanstalt.
- 真鍋一史 (2013). 「価値観の研究の視座」慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』. 86(7).
- Manabe, Kazufumi (2016). Use of Facet Theory in Developing Values Theory of Shalom Schwartz. *Aoyama Standard Journal* (Aoyama Gakuin University). 11.
- Milbrath, Lester W. (1965). *Political Participation: How and Why Do people Get Involved in Politics?* Rand McNally & Company.
- Schwartz, Shalom H. (1992). Universals in the Content and Structure of Values: Theory and Empirical Tests in 20 Countries. In M. Zanna (ed.), *Advance in Experimental Social Psychology.* 25. Academic Press.
- Schwartz, Shalom H. et. al (2012). Refining the Theory of Basic Individual Values. *Journal of Personality and Social Psychology.* Vol 103(4).
- Shye, Samuel (ed.) (1978). *Theory Construction and Data Analysis in the Behavioral Sciences.* Jossey-Bass Publishers.
- Shye, Samuel and Elizur, Dov with Hoffman, Michael (1994). *Introduction to Facet Theory.* Sage Publications.
- 田中義久 (1971). 「現代社会学における個人と社会」Edward A. Tiryakian 『個人社会』(解説論文). みすず書房.
- Williams, Robin M. Jr. (1968). The Concept of Values. In *The International Encyclopedia of the Social Sciences.* Vol.16. Macmillan and Free Press.

付記

本稿は、京都大学の太郎丸博准教授を代表とする科学研究費基盤研究 (B) 「価値意識と階層構造の変容に関する比較社会学的研究」(課題番号 25285148) の研究成果の一部である。このような研究の機会が与えられたことに対し、心から感謝の意を表したい。

Appendix イスラエルのプリテストの質問諸項目とその集計結果

	Total sample	Age group				
		20-29	30-39	40-54	55-64	65+
1 To what extent, in your opinion, is it desirable that people like you devote much thought to what is happening in the country in various respects (e.g. economics, society, politics, religion, education, etc.)?						
1. very desirable	53	59	60	52	47	45
2. desirable	30	26	28	30	31	34
3. somewhat desirable	9	9	7	9	13	13
4. not so desirable	5	4	3	9	7	5
5. not desirable	2	1	2	1	3	3
6. not at all desirable	1	2	—	1	—	—
	<u>100%</u>					
2-5 With regard to each of the following topics, please tell me whether you devote little or much thought to it.						
2 Government's handling of foreign policy and security of Israel						
1. very much thought	24	21	17	21	32	33
2. much thought	26	29	25	27	26	24
3. some thought	25	21	34	27	19	22
4. little thought	18	22	15	16	22	14
5. no thought at all	7	7	10	9	1	6
	<u>100%</u>					
3 Government's handling of economic matters (taxes, price increases, inflation, etc.)						
1. very much thought	51	50	51	49	61	48
2. much thought	26	25	30	25	26	21
3. some thought	15	14	14	16	8	22
4. little thought	5	7	3	4	4	6
5. no thought at all	3	3	2	5	1	3
	<u>100%</u>					
4 Labor relations in Israel						
1. very much thought	29	30	20	32	41	20
2. much thought	25	23	28	27	31	18
3. some thought	19	18	20	16	11	30
4. little thought	20	20	24	17	15	23
5. no thought at all	7	9	7	8	3	9
	<u>100%</u>					
5 Education in Israel						
1. very much thought	46	48	47	52	49	29
2. much thought	23	17	24	20	32	29
3. some thought	13	13	9	16	8	17
4. little thought	13	16	13	10	9	19
5. no thought at all	5	6	8	3	1	7
	<u>100%</u>					
17 For the good of the country, it is important that most people in Israel work hard						
1. definitely agree	31	31	24	31	40	34
2. agree	27	15	30	32	30	33
3. agree somewhat	11	13	9	12	7	15
4. disagree somewhat	13	16	12	14	12	6
5. disagree	11	14	17	7	10	10
6. definitely disagree	6	10	9	5	1	3
	<u>100%</u>					

	Total sample	Age group				
		20-29	30-39	40-54	55-64	65+
18 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel understand and help others						
1. definitely agree	55	46	49	62	55	59
2. agree	35	37	38	31	41	30
3. agree somewhat	7	10	10	5	3	4
4. disagree somewhat	2	2	2	1	—	3
5. disagree	1	2	1	1	1	2
6. definitely disagree	1	2	—	1	—	1
	<u>100%</u>					
19 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel honor their parents						
1. definitely agree	56	42	46	62	67	67
2. agree	27	28	31	26	27	26
3. agree somewhat	8	13	12	6	3	2
4. disagree somewhat	4	9	4	1	1	2
5. disagree	3	3	4	3	1	1
6. definitely disagree	2	5	2	3	—	1
	<u>100%</u>					
20 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel believe in God						
1. definitely agree	23	16	23	24	29	22
2. agree	18	10	21	16	16	26
3. agree somewhat	9	7	6	10	10	13
4. disagree somewhat	13	15	7	14	18	9
5. disagree	20	19	22	22	21	15
6. definitely disagree	18	33	20	13	7	15
	<u>100%</u>					
21 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel respect the authority of the governing bodies						
1. definitely agree	35	35	28	33	41	44
2. agree	43	36	46	45	45	40
3. agree somewhat	11	13	13	12	5	10
4. disagree somewhat	7	8	8	7	7	3
5. disagree	3	3	5	2	3	1
6. definitely disagree	1	5	—	1	—	1
	<u>100%</u>					
22 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel live comfortably						
1. definitely agree	36	34	33	37	36	40
2. agree	37	30	39	41	40	35
3. agree somewhat	15	20	14	14	15	13
4. disagree somewhat	8	9	8	6	8	9
5. disagree	3	5	3	3	1	2
6. definitely disagree	1	2	3	—	—	1
	<u>100%</u>					
23 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel feel secure						
1. definitely agree	71	65	72	71	72	76
2. agree	25	27	25	27	26	22
3. agree somewhat	3	5	3	1	3	2
4. disagree somewhat	1	1	1	1	—	—
5. disagree	—	1	—	—	—	—
6. definitely disagree	—	2	—	—	—	—
	<u>100%</u>					

	Total sample	Age group				
		20–29	30–39	40–54	55–64	65+
24 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel enjoy beauty						
1. definitely agree	37	34	30	39	47	37
2. agree	33	28	38	35	28	35
3. agree somewhat	13	15	15	10	11	13
4. disagree somewhat	7	6	7	5	8	10
5. disagree	5	7	5	7	4	1
6. definitely disagree	5	10	4	3	1	3
	<u>100%</u>					
25 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel make an accounting of the benefits and costs of their deeds						
1. definitely agree	37	33	28	43	43	36
2. agree	40	39	45	39	38	40
3. agree somewhat	11	7	9	13	14	14
4. disagree somewhat	7	12	10	3	4	7
5. disagree	3	7	4	1	1	1
6. definitely disagree	2	2	5	1	–	2
	<u>100%</u>					
26 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel behave according to their feelings						
1. definitely agree	19	13	17	19	27	22
2. agree	24	23	24	28	20	26
3. agree somewhat	13	10	11	17	14	11
4. disagree somewhat	19	19	22	14	24	17
5. disagree	17	23	18	15	11	17
6. definitely disagree	8	12	9	7	4	8
	<u>100%</u>					
27 For the <u>good of the country</u> , it is important that most people in Israel agree on what is good and what is evil						
1. definitely agree	22	17	21	17	29	30
2. agree	38	33	35	50	34	30
3. agree somewhat	15	13	16	14	16	15
4. disagree somewhat	11	13	8	10	11	15
5. disagree	8	13	11	6	7	4
6. definitely disagree	6	10	8	3	3	4
	<u>100%</u>					

Facet Approach and Studies of Values: Examinations of Louis Guttman's Works

ABSTRACT

The purpose of this paper is to examine in detail the published works of Louis Guttman and his colleagues. In particular, the present paper deals with their works that study values from a facet perspective. This is due to the fact that, on the one hand, they established the facet approach using survey data from empirical studies of values. On the other hand, they applied facet approach to their empirical studies of values. Their values research approach is both unique and promising. The study of values could benefit from their research methodology. We already have an example. Shalom Schwartz's theory of basic human values is currently attracting attention from the global academic community. He proposes a "circular continuum of basic human values". This structural model has been developed along the lines of Louis Guttman's facet theory. In this respect, this model is regarded as a methodological legacy that Schwartz inherited from Guttman.

In this paper, the author attempts to summarize the facet approach, and then organize the results of empirical research on values by Guttman and his colleagues.

The first section outlines the facet approach. The facet approach is composed of (1) facet design (a. conceptual framework, b. scalar question items, c. mapping sentence), (2) facet analysis (a. weak monotonicity coefficient, b. smallest space analysis), and (3) facet theory (a. the first law, b. the second laws, c. the laws of polytone regressions).

The process and product of their empirical values research are examined in the second section. Their research findings are mainly based on the comparative and collaborative studies on "Values Change in Contemporary Europe" (initiated by the European Science Foundation).

The last section is a discussion of the problems and prospects of their study of values from a facet perspective.

Key Words: facet approach, facet design, facet analysis, facet theory, weak monotonicity coefficient, smallest space analysis, radex